

## 第8回 決算書アナリスト試験・出題の趣旨

**問題の構成と内容：** 構成は、4部構成で、選択問題（第1問）、収益性の問題（第2問）、安全性の問題（第3章）、投資の問題（第4章）となっており、その構成は変わらない。即ち、テキストに沿って、企業活動の分析としての収益性と安全性ならびに投資の分析になっている。

**第1問**は、選択問題であり、第2問以降で触れられなかった指標および事項を問い、試験として分析の総ての範囲の知識を問うことを目的としている。テキスト（第3版）により各問の該当のページを示しておく。

1. →P. 30, 31.    2. →P. 15.    3. →14, P39~40.    なお、営業資産については、P. 6, P. 41. も参照。    4. →P. 45.    5. →P. 57.    6. →P. 6, 49.    7. →p. 38-39.    8. →P. 39.    9. →P. 60~61.    10. →P. 21.

会社決算書分析は企業活動を分析することを目的とするが、そのためには、企業活動とその活動の決算書上での表示について理解しておくことが必要になる。今回はその理解に重点をおいて出題している。

**第2問**は、収益性に係る問題である。出題の場として株主総会を設定している。株主の立場での収益性はROEであるから、ROEを問うている（テキスト、P. 41~42.）。この企業のROEは下降傾向にある。次に、この結果をもたらす企業経営の問題に入っている。先ず全体を把握するために、ROAを問うている（テキスト、P. 38.）。ROAも下降傾向にある。そこで、企業経営の構造上の問題として、その原因が利益率（テキスト、P. 44.）にあるのか回転率（テキスト、P. 48.）にあるのかを探っている。結果、利益率にあることが判明したので、分析の眼は具体的な利益獲得活動に向けられねばならない。最も重要なのが営業活動であるので、営業活動を分析するという分析の深化を図っている（テキスト、P. 44~46.）。

このように企業活動の分析の仕方を問うているが、今回は損益計算書に重点を置いて出題している。

**第3問**は、安全性に係る問題である。安全性の判断においては、貸借対照表は勿論、損益計算書ならびにキャッシュ・フロー計算書が用いられる。今回は、キャッシュ・フロー計算書の利用に眼を向けて分析している。先ず安全性に係る基本的指標である流動比率（テキスト、P. 53.）と総資産負債比率（テキスト、P.60.）を計算させ、短期と長期のストックの視点での安全性を確認させている。これには問題がない。更に、損益計算書情報を見ると、順調に業績を伸ばしている。それにも関わらず、キャッシュ・フローがマイナスになっていることは通常は理解しがたい。そこで、この原因を分析調査させることが本問題の最終的な意図になっている。それを明らかにするのに、キャッシュ・フロー計算書情報を利用してはいる。

ここでは、キャッシュの流れが企業の利益獲得活動の構造を支える資産の動きを示し

ていることを理解して欲しい。つまり、キャッシュ・フロー計算書は、安全性分析で基本となる時点の貸借対照表情報を超えて（では分らない）、期間（資金の動き）に関する情報を内在していることを理解して欲しいということが最終的な出題の意図である。これが最終問になっている。

**第4問**は、投資に係る問題である。ここでは、一般的な投資を含めて投資の基本式となる利回りすなわち配当利回り（テキスト、P. 73.）から始めて、企業の配当政策を見る配当性向（テキスト、P. 42.）、更には、投資をするに当たって、当該投資つまり株価が割安か割高かの判断材料になる株価純資産倍率（テキスト、P. 72～73.）、株価収益率（テキスト、P. 73.）を問うている。これにより、株式投資に当たって必要な一連の手続きを体得していることが証明される。

これを補足する形で、本試験の主題範囲には入らないが、ESG という単なる金儲けだけでない投資家の社会的責任についての話題も加えておいた。これは、本試験の受験者に、単なる試験の合否ではなく、今後の生き方において、このような自覚も持って欲しいという希望を示したかったからである。

**最後に:**本試験の意義として、第3問に典型的に見られるように実際の例を素材にしている。従って、受験生が実際の財務諸表を分析するのに有用になる筈である。ただし、作問に際し、試験として納得の行く正解を導くための資料を探す苦労も推察して頂ければ、この上もない幸せであることを付け加えさせてもらいたい。